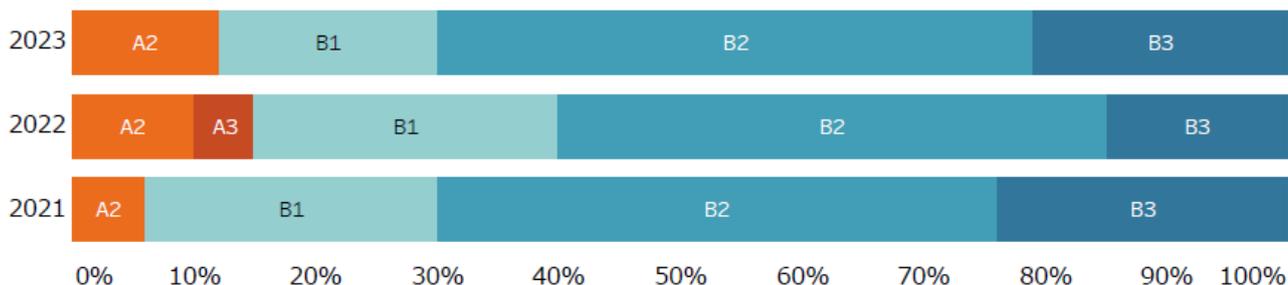


2023年 市川 算数（第1回）

過去3年の思考コード別出題割合は次のようになります。平面図形、立体図形、速さ、調べる問題と、市川での頻出分野が見られました。2022年と比べて、B2、B3が増えています。市川を志望する受験生であれば、確実に得点しておきたい問題が見られますが、気づきづらいポイントもあるため、差がついたと思います。



例年同様、大問1が計算・一行題、大問2以降が大設問の構成でした。大問1は、確実に得点しておきたい問題が並びます。(3)は、 $182 = 130 + 52$ 、 $156 = 52 \times 3$ に気づくと、52、104、130の最大公約数を求めればよいことがわかります。大問2は、上り、下り、静水時の速さの関係を整理することで、答えを導くことができます。差がついた問題と思います。(3)は、流速が何倍になっても、下るAと上るBの速さの和は変わりません（流速が打ち消し合うため）。この点に気づけるかどうかポイントでした。

大問3は、図形上の点移動でした。(1)は、最初だけ2点が動く距離の和が30mとなり、以後は和が+40mとなっていく点に注意が必要でした。(2)は、点Pと点RがFで出あって三角形の辺上をCまで重なって移動することになります。(1)、(2)は取っておきたい問題ですが、(3)は、PEとRCの交点Tを見つけても、糸口がつかめなかった受験生も多かったと思います。FからPに向かって直線を引いてできる二等辺三角形FPEに着目することがポイントでしたが、後回しにしてよい問題と思います。

大問4は、市川でよく出題される作図の問題でした。(1)は、展開図はわかっても、どのように作図するかとまどった受験生もいたと思います。扇形が120度となっているので、正三角形を作図することがポイントでした。(2)、(3)は、正三角形の半分となる30度、60度、90度の三角形を利用します。(3)は後回しにしてよいと思います。大問5は、市川の後半で見られる「調べる問題」でした。(1)は、ルールの理解と運用となるため、確実に取っておきたい問題です。(2)は、(1)を続けて調べることで、マス目にならぶ記号の規則をとらえることができます。(3)は、とらえた規則の一般化と活用ですが、かなり手間がかかるため、見送ってよい問題と思います。

大問2以降は難度が上がるため、大問1は確実に取っておきたい問題となります。また、問題で問われている状況がどのようなものであるか、自分なりの言葉に置き換えて、何が問われているかを理解することが大切です。さらに、例年、調べる力が求められる問題が出題されるため、丁寧に調べて、規則を一般化して活用する視点を持つことが大切です。あくまでも予想ですが、大問2(3)、大問3(2)(3)、大問4(3)、大問5(3)を落としたとしても、およそ7割には達することができると考えられます。